

## 記憶風景を縫う―チリのアルピジェラと災禍の表現

本展覧会では、南米チリの軍事独裁時代（1973-1990）に発達したタペストリー<アルピジェラ>と、戦争・紛争や災害の経験を描いた国内外の裁縫作品をともに展示します。仙台・京都を巡回してきた本展の最終会場となる長崎では、1945年に長崎にて被爆した詩人、福田須磨子(1922-1974)による作品をあわせて展示します。手仕事による表現がことばや地域の壁を超えて持ちうる可能性を、ともに考えてみたいと思います。

仙台展：
  
2017年5月30日(火)～6月12日(月) 11:00-19:00
  
東京エレクトロンホール宮城 5階 501 展示室
  
住所：宮城県仙台市青葉区国分町 3-3-7

京都展：
  
2017年7月1日(土)～7月9日(日) 11:00-18:00
  
同志社大学寒梅館ギャラリー（寒梅館地下1階）
  
住所：京都府京都市上京区御所八幡町 103

長崎展：
  
2017年8月29日(火)～9月3日(日) 10:00-19:00（最終日は16時迄）
  
長崎県美術館 県民ギャラリー A 室
  
住所：長崎県長崎市出島町 2-1

※全会場入場無料。会期中、関連イベントあり。

主催：「記憶風景を縫う」実行委員会
  
共催：東北学院大学地域共生推進機構、Survivart、Conflict Textiles
  
助成：公益財団法人朝日新聞文化財団、平成 29 年度科学研究費補助金 若手(B)
  
東北学院大学平成 28 年度学長研究助成金、公益財団法人長崎平和推進協会
  
協力：大島博光記念館、長崎の証言の会
  
後援：長崎市教育委員会、NBC 長崎放送、NHK 長崎放送局、KTN テレビ長崎、長崎新聞社

◎「記憶風景を縫う」実行委員会
  
2016年4月より本展に向けて組織、活動開始。仙台では、2016年6月～2017年1月にかけて、チリの文化・政治状況、被災地の手仕事活動、および裁縫を通じた社会支援や政治行動などをテーマに月1回の公開勉強会を開催しました。同時に国内外の個人・団体と協力しながら、政治暴力や人災・天災の記憶の継承と表現について考え、本展覧会を準備してきました。

実行委員会メンバー：酒井朋子(代表)、長内綾子、高橋創一、宮本直規
  
京都展 実行委員：尹慧瑛
  
長崎展 実行委員：友澤悠季

【勉強会概要】
  
2016年6月15日(水)「アルピジェラとはなにか」
  
講師：酒井朋子（東北学院大学准教授）

2016年7月13日(水)「アジェンデ政権の前と後」
  
講師：宮本直規（東北学院大学専任講師）

2016年8月20日(土)「ピノチェト軍事政権下の映像表現～『戒厳令下チリ潜入記』から考える」
  
2016年9月8日(木)「ピノチェト軍事政権下の映像表現～『光のノスタルジア』から考える」
  
講師：高橋創一（編集者／ライター）

2016年10月1日(土)「日本のチリ人民連帯運動とアルピジェラ」
  
講師：大島朋光（大島博光記念館・館長）

2016年11月19日(土)「震災を縫う。記憶風景を縫う。」
  
講師：天野寛子（フリー刺繍画家／昭和女子大学名誉教授）

2016年12月17日(土)「手仕事にみる被災の経験：インド西部地震と東日本大震災」
  
講師：金谷美和（国立民族学博物館外来研究員）

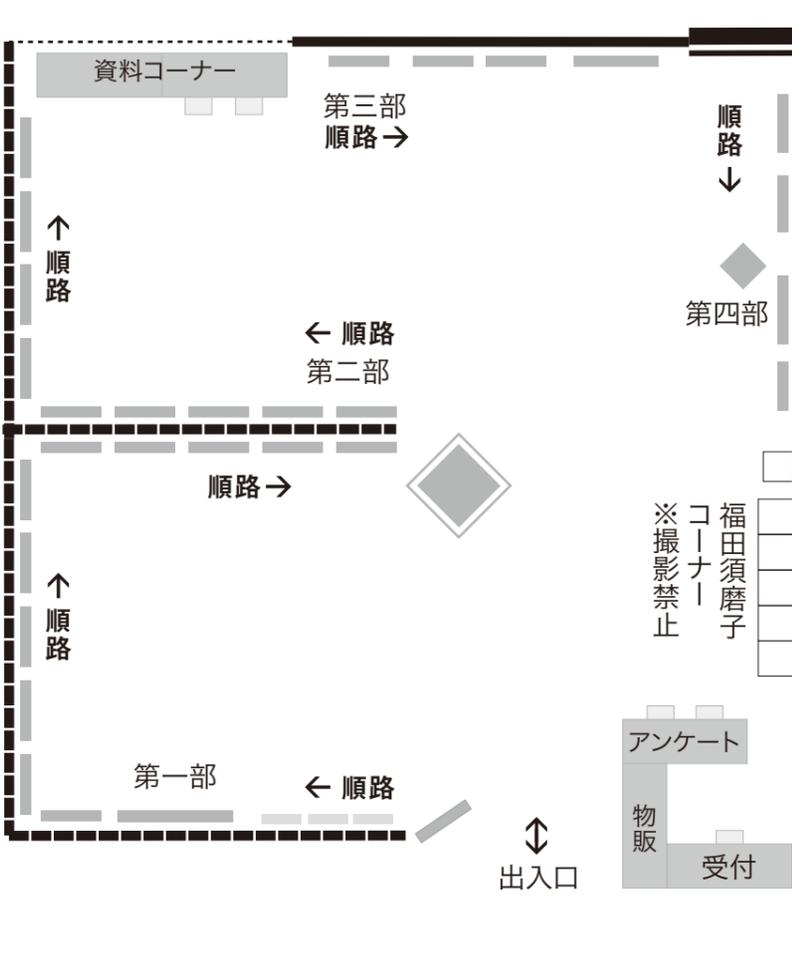
2017年1月21日(土)「メモリアルキルト、その営みについて」
  
講師：小浜耕治（東北 HIV コミュニケーションズ代表）

### <観覧上のお願い>

◎福田須磨子作品の写真撮影はご遠慮ください。その他の作品撮影は、フラッシュ、三脚等を使用しない場合に限り可能です。◎ビデオ撮影は禁止です。◎筆記用具は鉛筆のみ使用可です。◎展示室内での飲食（飴、ガム等を含む）はご遠慮ください。◎携帯電話のご使用は、他のお客様のご迷惑になりますので、ご使用はご遠慮ください。また、電源をお切りになるか、マナーモードに設定のうえ、ご鑑賞ください。◎館内では走らないでください。◎展示物、展示ケース及び展示壁にはお手をふれないでください。◎他のお客様のご迷惑にならないよう、会話や履物の音にはご注意ください。◎館内では、美術作品の保全、鑑賞環境維持等のために、スタッフが「お声がけ」する場合があります。ご了承ください。

コーディネーター：
  
友澤悠季（長崎大学環境科学部）

# 長崎展 | 会場マップ



## 関連イベント \*全て参加費無料

### ◎上映会『われなお生きてあり』——被爆詩人・福田須磨子(1922-1974)の声を聴く

2017年9月2日(土) 14:00-15:30、予約不要
  
会場：長崎県美術館 2階 ホール

### ◎作品ガイドツアー

2017年8月29日(火)～9月1日(金) 13:00-13:30、2日(土) 11:00-11:30
  
ガイド：「記憶風景を縫う」実行委員
  
2017年9月3日(日) 10:30-11:30
  
ガイド：ロベルタ・バチチ(キュレーター、Conflict Textiles) 通訳付き
  
全て予約不要、会場：長崎県美術館 県民ギャラリーA

### ◎ワークショップ「アルピジェラをつくってみよう」

2017年9月3日(日) 13:00-15:00、要予約
  
会場：長崎県美術館 県民ギャラリーA

各イベントの詳細は、長崎展のチラシをご覧ください。
  
受付スタッフまでお問い合わせください。

Stitching Memoryscape

## 記憶風景を縫う

チリのアルピジェラと災禍の表現

## アルピジェラとは

○アルピジェラは、ピノチェト軍事独裁政権時代(1973-1990)のチリで、ポブラシオンと呼ばれる都市部の貧困地区で作られ始めました。

○作り手は貧しい女性たちだったので、材料になったのは古着や余り布でした。裏地にはジャガイモや小麦の袋を切り開いたものが使われました。

○アルピジェラ作りは、様々な人道支援団体の支援によって行われていました。また、これら人道支援団体のネットワークを通じて、主にチリ国外で販売され、作り手のわずかながらの生活の足しとなりました。代表的な支援団体に、チリのカトリック教会が1976年に組織した「連帯ピカリア」があります。

○アルピジェラ作りの活動は、地域コミュニティにとっても大きな意味を持ちました。同じ苦しみをかかえる者同士が集まって手を動かすワークショップは、言葉にしがたい経験や感情をわかちあう重要な機会にもなったのです。

○アルピジェラには、生活苦を乗り越えるための地域内での助け合いの様子や、政治犯として捕らえられ行方不明になった人々をめぐる問題などが描かれました。

○民政移管後のチリでは、アルピジェラ制作活動はかつてほど盛んではなくなりましたが、現在進行形の問題を描くアルピジェラが、今も作られ続けています。またアルピジェラ作りの活動は、紛争や災害の経験、あるいは社会問題を描く手法として、世界の多様な地域に広がっています。

●お問い合わせ
  
「記憶風景を縫う」実行委員会
  
TEL：095-819-2784(友澤)
  
E-mail：arpilleras@survivart.net
  
Facebook：arpilleras.jp

## アルピジェラの歴史的背景

【アジェンデ社会主義政権のチリ】

1970年にチリで成立したサルバドール・アジェンデの人民連合政権は、武力革命なしに達成された世界初の社会主義革命とも称されるものでした。アジェンデ大統領は、ただちに基幹産業の国営化、農業改革、労働環境の改善、教育の平準化などに取り組みました。しかし冷戦のさなかにあって、アジェンデは国内外の強い反発にも直面します。主要輸出品目である銅鉱の国際的価格操作など西側諸国による圧力、およびブルジョア主導のストライキによる経済活動妨害などにより、チリは経済的に追い込まれていきます。階層間の分裂も次第に広がっていきました。そうした状況下で、1973年9月11日、米国政府の後ろ盾をえたチリ陸軍のピノチェトがクーデターを起こし、アジェンデ政権は崩壊します。

【ピノチェト軍事独裁体制】

クーデターを「成功」させたピノチェトは翌年には大統領に就任します。以後1990年まで続く軍事独裁のもとでは、徹底的で暴力的な政治弾圧が見られました。逮捕・抑留、国外追放などで多くの人々がその人権を蹂躪されました。さらに拷問や、裁判なしの処刑が横行し、今日まで生死のわからない人もいます。軍部が違法な殺害の事実を覆い隠すため「行方不明者」のラベルを用いたケースもありました。「政治的収監と拷問に関する国立委員会」（パレッチ委員会）による2011年の報告書では、3,065人以上が殺害され、もしくは行方不明になったと報告されました。実際の被害者ももっと多いものと推定されています。

ポブラシオンの住民は、ピノチェト政権の自由開放経済政策によっても苦しめられました。中小企業や工場に勤めていた多くの住民が失業し、大衆居住区であったポブラシオンは「スラム」のような貧民街としての性質を強めていきました。

【独裁体制の終了】

1988年の国民投票では、ピノチェト政権続行に対し「NO」をつきつける声が勝利し、これによってチリの軍事独裁体制には一つの終止符が打たれました。独裁体制期に起きた人権侵害の実情をつきとめるための試みは、現在もなおチリで続けられています。

## 記憶風景の断片を縫い合わせること

チリのアンデス山脈は、地図上の、そして私個人のアイデンティティの指標として私の中に生きています。この山々の記憶があることで、私はどこにいてもチリの風景を思い浮かべることができます。同じように、アルピジェラとそこに描かれている山々は、喋りの言葉とは異なるあり方で人びとの体験を伝える「縫われた言葉」となっていました。私たちの生活を引き裂いた政治弾圧のことを伝えようとすると、言葉では足りないことがあります。けれども、「生きられた」布切れの手触りが縫い合わされると、そこに痛みと生のしなやかさを表現する一つの絵が浮かび上がるのです。

女たちの中には一人でアルピジェラを縫う人も、何人かで集って縫う人もいます。いずれにせよ彼女たちは、裁縫という日常的な活動を通じて、自分たちが経験した残虐な出来事を思い出し、それについて証言し、告発し、抵抗しています。このようにして、伝統であり家庭内のものであった裁縫という営みが、力強い非暴力の抵抗行動となり証言となるのです。（…）

時間を一層になって重なる時間を、それぞれのアルピジェラには見いだすことができます。それは過去の経験の時間であり、アルピジェラの制作の時間であり、過去の痛みを記憶を再び訪れ、そして何を伝え、何を言わないかについて選ぶという時間です。加えて、私たちが展覧会を実現するために費やした時間があり、展示を見るあなた自身の時間があります。（…）

Conflict Textilesはアルピジェラのコレクションで、2008年以降、330以上のアルピジェラとその他の布製作品を記録し保管してきました。アルスター大学のウェブ・アーカイブを通じ、128の展覧会と関連イベントの様子を知ることのできる場所にもなっています。日本のチームや大島博光記念館と共同で作業すること、および、二度と戦争を受け入れないと憲法に定めた民とともに行動することは、非常に重要な意味を持っていました。そのことが種となって、この2017年、仙台、京都、長崎であなた方が目にする本展覧会が実現しているのです。

ロベルタ・バチチ（キュレーター）  
『記憶風景を縫う』図録  
序文 "Stitching Memoryscape" より抄訳  
(日本語訳 酒井朋子)

## 長崎の記憶風景

——いつも“ピカッと光ったときから始まる原爆体験”なんですけれど、実はその前にも…そこに至るまでの暮らしと、その後もすごく長い暮らしがあって。…

つつい1945年8月9日の話ばかりしてきたけど、本当は9月9日とか、もっと言ってしまうえば、12月9日なんかもっと寒くて、もっと大変だったんじゃないかなって思うんです。

（橋場紀子「〈報道記者座談会〉記者として、長崎原爆に向かい合う」での発言、長崎原爆の戦後史をのこす会編『原爆後の七〇年』2016年、252頁）

長崎という土地が経験した、歴史上もっとも巨大な災禍のひとつが、原子爆弾の被弾であることは言うまでもありません。1945年8月9日当時、長崎市には約27万人が暮らしていました。ひとつの爆弾が約7万4千人を殺し、残された人びとは、具体的な生活上の困難に見舞われ、悲しみと不安に苛まれながら、戦後の復興過程を生きてきました。

アルピジェラという、一見カラフルで可愛らしい作品に描かれた弾圧の記憶と、これを縫った女性たちの歴史は、私たちに、ことば以外の手段による記憶の継承の方法を教えてください。苦難の体験を背負った人びとが、日常の中で作った「もの」たちが、長崎にも多数あるのではないか。その「もの」の質感から、伝わる歴史もあるのではないか。

今回私たちはこうした視点から、被爆詩人として長崎の女性史に名を刻んだ福田須磨子（1922-1974）による「ぎんなん人形」と「壁掛け」に注目しました。須磨子が詩にうたった亡き家族への追慕、被爆者の苦難、原水爆反対への思いは、彼女自身の作品にあらわれているので、ここでは繰り返しません。4千度の熱と爆風と放射線で原子野となった地で、どのようにあすの生活を立てるのか、安らぎのない日常を送ってきた人びとのひとりとして、須磨子を位置づけてみたいと思います。「もの」を作り出した須磨子の営みが、私たち自身の日常との接点となり、遠い「過去」と「いま」をつなぐことを願っています。

友澤悠季（長崎大学教員）

◆作品概要

【ぎんなん人形】

阿茶さん／オランダ万才／童貞さん（シスター）

計3体

長崎市、1957～60年代

【壁掛け】

平和祈念像／おらんだ船／グラバー邸／おらんだ万才

計4枚

長崎市、1960年代

（いずれも長崎県立長崎図書館所蔵）

本作品の制作には、福田須磨子のほか、義弟の鈴木皓策、鈴木の子、須磨子の義理の息子、須磨子の友人がそのときどきでかわりました。モチーフの多くは、古くからの貿易港を擁する長崎ゆかりの風物です。「阿茶さん」は中国人に対する長崎での愛称、「童貞さん」はカトリックのシスターへの愛称、「おらんだ船」は「長崎古版画」（17～19世紀にかけて作られた長崎の代表的な土産品）に幾度も描かれるもので、「グラバー邸」は、スコットランド出身の商人トーマス・ブレーク・グラバーの居宅、1961年に国の重要文化財に指定されました。「平和祈念像」は、市の委託を受けた長崎県出身の彫刻家・北村西望（1884-1987）の制作で、国内外からの募金によって1955年に建てられましたが、被爆者に対する援護・援助策がない中での建造は疑問も呼び、須磨子が世に出るきっかけにもなりました（福田須磨子展示パネル参照）。